

岩手医科大学歯学部口腔病理学教室における 病理組織検査の報告 - 1996年度の集計 -

佐藤 方信, 佐藤 泰生

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

(主任: 佐藤 方信 教授)

(受付: 1997年6月19日)

(受理: 1997年7月15日)

Abstract : A statistical report was conducted in order to investigate the real condition of pathological examinations diagnosed in our department in 1996.

A total of 667 biopsy materials was discovered among 536 cases (M ; 241, F ; 295). As for the histological classifications of these biopsy materials, odontogenic benign lesions consisted of 3 ameloblastomas and 3 odontomas. The non-odontogenic benign lesions were 36 fibromas, 15 hemangiomas, 8 papillomas, 6 pleomorphic adenomas, 3 lipomas, 11 chronic and localized hyperplastic gingivitis (Epulis) and 20 Sjögren's syndromes. Also found were 54 cases of non-odontogenic malignancy which consisted of 48 squamous cell carcinomas, 1 verrucous carcinoma, 2 adenocarcinomas and 3 others. Among the histologic types of odontogenic cyst, 43 radicular cysts, 14 primordial cysts and 14 dentigerous cysts were revealed. And the following types of non-odontogenic cyst were discovered : 24 mucoceles, 30 post-operative maxillary cysts and 4 incisive canal cysts. In addition, 20 hyperkeratosis(leukoplakias), 4 epithelial dysplasias and 51 chronic inflammatory(granulation) tissues were found.

Key words : biopsy, statistical report, oral lesion

緒 言

今日、病理組織検査の臨床における重要性は増す一方であり、大学以外からの依頼も増加してきた。著者らの教室ではこれまで本学歯学部附属病院の病理組織検査を担当してきたが、今回1996年度に取り扱った病理組織検査についてまとめたので若干の考察を加えて報告する。

症例と検索方法

1996年度(平成8年)に行われた病理組織検査の集計は本学中央臨床検査部病理部門(主任: 中村眞一教授)の病理組織検査症例ファイルの中から本学歯学部口腔病理学教室で診断した症例を収集し、これらを種々の観点からまとめた。

なお、症例数(病変数)の集計は1症例について行われる組織検査が1回とは限らないので

A statistical report of pathological examinations diagnosed in the department of oral pathology of Iwate Medical University in 1996.
Masanobu SATOH and Hiroataka SATO
(Department of Oral Pathology, School of Dentistry, Iwate Medical University, Morioka, 020 Japan)

Table 1 The monthly number of the biopsy -1996-

Medical Source	Month												Total
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
Inside	36	54	58	47	44	59	56	57	46	48	52	39	596
Outside	8	10	7	7	8	3	8	1	6	1	9	3	71
Total	44	64	65	54	52	62	64	58	52	49	61	42	667

Table 2. Number of frozen section diagnosis -1996-

Sex	Male	Female	Total
No. of cases	20	14	34
Mean age	54.8±16.0	55.1±20.1	54.9±17.8

同一症例が重複して収集されることのないよう細心の注意を払った。また、症例の出所（臨床科）、年齢、性などの臨床的事項は組織検査依頼書の記載によった。

結 果

1. 病理組織検査件数と症例数

1996年度の組織検査件数（Table 1）は667件で、そのうち学内が596件で、学外が71件であった。学内の検査材料の出所は歯科麻酔科の1件の他は全て口腔外科（Ⅰ、Ⅱ）からの依頼であった。学外からの依頼では雄勝中央病院歯科が23件、県立久慈病院歯科が16件、猪苗代歯科医院が8件、盛岡市立病院歯科が6件であり、その他は全て開業医からの検査依頼であった。

月別の検査件数では2月（64件）、3月（65件）、6月（62件）、7月（64件）、11月（61件）などが多く、1月（44件）と12月（42件）が少なかった。

また、この年度の迅速診断は全て学内からの依頼であったが、その件数は34件であった（Table 2）。

検査症例数は536例（男241例、女295例）で、女性症例の検査が多かった（Table 3）。学内では第Ⅰおよび第Ⅱ口腔外科をあわせて462例、歯科麻酔科1例であった。年代別には50歳

Table 3. Age distribution of case -1996-

Age group	Male	Female	Total
0-9	2 (1)	11 (1)	15
10-19	20 (3)	18 (3)	44
20-29	12 (4)	24 (4)	44
30-39	28 (3)	28 (5)	64
40-49	24 (7)	52 (2)	85
50-59	34 (7)	55 (5)	101
60-69	52 (7)	35 (10)	104
70-79	27 (3)	24 (5)	59
80-89	6 (1)	11 (1)	19
90-99	0 (0)	0 (0)	0
Unknown	0 (0)	0 (1)	1
Total	205(36)	258(37)	536
	241	295	

(): Request from the outside hospitals.

代（101例）と60歳代（104例）が多く、10歳未満（15例）と80歳代（19例）の症例は少なかった。また、90歳以上の症例はなく、年齢不詳が1例（開業医）であった。

2. 組織診断別症例数

腫瘍および腫瘍様病変と診断した症例（平均年齢±標準偏差）について見ると（Table 4）、歯原性良性病変ではエナメル上皮腫が3例（14.7±2.9歳）、歯牙腫が3例（10.7±1.7歳）で、非歯原性良性病変が109例、非歯原性悪性病変が54例であった。非歯原性良性病変は女性症例が多く、病変別には線維腫（刺激性線維腫、線維性過形成、線維性ポリープなど）（36例、48.4±14.8歳）、過角化症（白板症）（20例、59.5±11.9歳）、血管腫（15例、48.9±19.5歳）、乳頭腫（8例、39.0±20.6歳）、多形性腺腫（6例、46.7±12.8歳）などが多かった。また、非歯原性悪性病変は性別では圧倒的に男性症例が多く、組織型別には扁平上皮癌が48例

Table 4. The number of tumors and tumor like lesions --1996--

Lesion	Male	Female	Total
Odontogenic, benign	2	4	6
Ameloblastoma	1	2	3
Odontoma	1	2	3
Non-odontogenic, benign	43	66	109
Papilloma	2	6	8
Papillary hyperplasia	2	1	3
Hyperkeratosis (Leukoplakia)	9	11	20
Erythroplakia	0	1	1
Epithelial dysplasia	3	1	4
Fibroma (irritation fibroma, fibrous hyperplasia, fibrous polyp)	15	21	36
Cemento-ossifying fibroma	1	3	4
Periapical cemental dysplasia	0	1	1
Nodular fastiitis	0	1	1
Hemangioma	6	9	15
Angiomyoma	0	1	1
Hemangioendothelioma	0	1	1
Lymphangioma	2	0	2
Lipoma	1	2	3
Neurofibroma	0	1	1
Exostosis	0	1	1
Pleomorphic adenoma	2	4	6
Myeloma	0	1	1
Non-odontogenic, malignant	34	20	54
Squamous cell carcinoma	31	17	48
Verrucous carcinoma	0	1	1
Adenocarcinoma	2	0	2
Adenoid cystic carcinoma	0	1	1
Malignant lymphoma	1	0	1
Osteosarcoma	0	1	1
Total	79	90	169

(64.2 ± 14.6 歳) でその大半を占めており、ほかの病変は著しく少なかった。

嚢胞および嚢胞様病変について見ると (Table 5), 歯源性嚢胞が 71 例, 非歯源性嚢胞が 63 例であった。歯源性嚢胞では歯根嚢胞が 43 例 (39.6 ± 16.2 歳) と最も多く, 原始性嚢胞 (35.6 ± 19.7 歳) と含歯性嚢胞 (30.7 ± 17.1 歳) がいずれも 14 例であった。非歯源性嚢胞では術後性上顎嚢胞 (30 例, 52.4 ± 9.5 歳) と唾液

腺の粘液停滞嚢胞 (24 例, 23.3 ± 14.2 歳) が多かった。また, 組織学的に確診できなかった嚢胞 (嚢胞様病変) が 4 例みられた。

炎症性およびその他の病変では (Table 6), 扁平苔癬が 22 例 (53.6 ± 13.9 歳) と多く, シェーグレン症候群が 20 例 (54.0 ± 13.7 歳), エプーリスが 11 例 (48.2 ± 14.0 歳), 歯根肉芽腫が 9 例 (37.4 ± 15.7 歳) と多かった。また, その他には慢性炎症性 (肉芽) 組織および著変

Table 5. The number of cysts and cyst like lesions - 1996 -

Lesion	Male	Female	Total
Odontogenic	39	32	71
Radicular cyst	22	21	43
Primordial cyst (odontogenic keratocyst)	8	6	14
Dentigerous cyst	9	5	14
Non-odontogenic	32	31	63
Incisive canal cyst	2	2	4
Postop. maxillary cyst	18	12	30
Salivary duct cyst	0	1	1
Mucocele	11	13	24
Globulomaxillary cyst	0	1	1
Simple bone cyst	0	1	1
Epidermoid cyst	1	1	2
Cyst*	2	2	4
Total	73	65	138

*Precise type not histologically determinable.

のない唾液腺などと診断した症例は多かったが、特別な診断を付さなかった症例は12例であった。

考 察

臨床医学における病理組織検査の重要性は疑う余地はない。本学歯学部口腔病理学教室において取り扱った病理組織検査件数はこれまで逐年的に増加がみられ¹⁻⁴⁾、1995年は722件⁵⁾であった。このうち学外の歯科診療施設から依頼された病理組織検査件数は1993年が65件であり³⁾、今回集計した1996年は71件となっていた。1996年の月別の検査件数では1月と12月が少なく、2月、3月、6月、7月、11月が多かったが、これまでの過去の集計結果と比較したところ組織検査を取扱った月と検査件数との間には特別な傾向は見られなかった。

病理組織検査を受けた症例数は逐年的に増加して1995年には577例⁵⁾となったが、今回集計した1996年は536例と若干の減少がみられた。本学の歯学部付属病院口腔外科(I, II)を訪

れた初診患者数(初診料を算定した外来患者数)は1993年が2,814例、1994年が2,952例、1995年が3,037例、そして1996年が3,182例であった(歯学部付属病院事務室調べ)。これらの症例の中で各々の年度に組織検査を受けた患者数(%)はそれぞれ449例(16.0)、443例(15.0)、497例(16.4)、463例(14.6)となり、過去4年で見ると1996年は口腔外科の初診患者で組織検査を受けた症例の割合は最も低くなっていた。男女別の症例数を見ると、今回の集計では女性の症例数が多かったが、この傾向は1992年以降に毎年みられる傾向であった。これはシェーグレン症候群を疑って組織検査を行う症例が圧倒的に女性症例(男性10例、女性56例)が多いことに起因している。年代別に症例数をみると1991年度¹⁾と1992年度²⁾は50歳代が最も多く、1993年度³⁾、1994年度⁴⁾、1995年度⁵⁾は60歳代が最も多くなっていた。今回集計した1996年度は60歳代が104例で50歳代が101例とほぼ同数であり、50歳代症例数が顕著に増加していた。

Table 6. The number of inflammatory and the other lesions - 1996 -

Lesion	Male	Female	Total
Dental granuloma	3	6	9
Chronic and localized hyperplastic gingivitis (Epulis)	4	7	11
Pyogenic granuloma	2	2	4
Chronic ulcer	3	2	5
Chronic sinusitis	1	2	3
Foreign body granuloma	1	3	4
Amalgam tattoo	1	1	2
Lichen planus	8	14	22
Pemphigus vulgaris	1	3	4
Pemphigoid	1	0	1
Aspergillosis	1	1	2
Chronic sialoadenitis	2	1	3
Sialolithiasis	4	1	5
Sjögren's syndrome	1	19	20
Osteomyelitis	2	1	3
Sequester	1	0	1
Degenerated articular desk	0	1	1
Supernumerary tooth	1	0	1
Chronic inflammatory (granulation) tissue	28	23	51
No significant change in salivary gland	9	37	46
No evidence of malignancy	2	3	5
No diagnosis	3	9	12
Total	79	136	215

病変別の症例数についてみると、歯原性腫瘍ではエナメル上皮腫と歯牙腫がそれぞれ3例見られた。エナメル上皮腫は過去5年についてみると少ない年で3例³⁾、多い年では8例¹⁾見られているが、1996年は3例と少なかった。1996年度のエナメル上皮腫の平均年齢は14.7 ± 2.9歳と若かったが、過去4年では1992年度(4例)が47.3歳、1993年度(3例)が48.0歳、1994年度(5例)は43.7歳、1995年度(5例)は45.8歳といずれもこれより高齢であった。今回の集計では歯牙腫は3例と少なかったが、1991年には9例、1994年には7例と年度によっては比較的多い年もあった。WHO(1992)の新分類ではセメント質骨形成線維腫は骨原性新生物、根尖性セメント質異形成症は非新生物性骨病変に分類されているので、本報告では非歯原性良性病変として分類した。

乳頭腫、過角化症(白板症)、扁平苔癬の平均

年齢をそれぞれ1991年から1995年までの5年間¹⁻⁵⁾で見たとき、乳頭腫は50歳から59歳、過角化症(白板症)は56歳から62歳、扁平苔癬は56歳から66歳の間にあったが、今回の集計では乳頭腫が39.0歳、扁平苔癬が53.6歳と若干若くなっていたが、過角化症(白板症)は59.5歳で過去の年齢構成の範囲にあった。扁平上皮癌の症例数は1991年¹⁾が27例であったが、逐年的に症例は増し、1995年度には53例となり、口腔癌の増加傾向が示されていたが、今回集計した1996年度は47例と若干症例数は減少していた。また、扁平上皮癌症例の平均年齢を過去5年間で見ると1992年²⁾は60.8歳で最も若く、1995年は68.2歳とこれまでで最も高齢となっていた。今回の集計では1996年度の扁平上皮癌症例の平均年齢は64.2歳で過去の症例¹⁻⁵⁾の年齢の範囲に入っていた。

歯原性嚢胞の組織型別の症例数を過去5

年¹⁻⁵⁾の集計でみると各年で歯根嚢胞が多く、原始性嚢胞と含菌性嚢胞の症例数は年度により多少の変動がみられている。今回集計した1996年度は歯根嚢胞(43例)が最も多いことに変わりはないが、原始性嚢胞と含菌性嚢胞がともに14例であった。また、これらの嚢胞の平均年齢は歯根嚢胞で最も高く、含菌性嚢胞で最も若かったが、このような平均年齢についての所見は過去5年¹⁻⁵⁾の症例において毎年見られていた傾向であった。非歯原性嚢胞の大半は術後性上顎嚢胞と唾液腺の粘液停滞嚢胞であったが、このような傾向は過去の集計¹⁻⁵⁾でも見られていた。また、これらの非歯原性嚢胞症例の平均年齢を過去5年¹⁻⁵⁾の症例について見ると、術後性上顎嚢胞は47歳から52歳の範囲にあり、唾液腺の粘液停滞嚢胞では21歳から24歳の範囲にあった。今回集計した1996年の術後性上顎嚢胞の症例は52.4歳、唾液腺の粘液停滞嚢胞は23.3歳であり、いずれの嚢胞の症例も過去の症例の年齢範囲に入るものであった。

結 語

1996年に著者らの教室で取り扱った病理組織検査を種々の観点から集計し、若干の考察を加えてその結果を報告した。

謝 辞

1996年に行った病理組織検査をまとめるにあたり、ご援助をいただいた本学中央臨床検査病理部門(主任:中村眞一教授)臨床検査技師安保淳一氏と口腔病理学講座技術員補寺田歆子さんに感謝します。また、本学歯学部附属病院を訪れた初診患者数を調べて下さった同病院事務室長千田博敏氏に感謝します。

文 献

- 1) 佐藤方信, 佐藤泰生, 藤井佳人: 本学歯学部口腔病理学教室における病理組織検査の報告—1991年度の集計—, 岩医大歯誌, 18: 136-142, 1993.
- 2) 佐藤方信, 藤井佳人, 佐藤泰生: 本学歯学部口腔病理学教室における病理組織検査の報告—1992年度の集計—, 岩医大歯誌, 18: 210-215, 1993.
- 3) 佐藤方信, 藤井佳人, 菊地博生: 本学歯学部口腔病理学教室における病理組織検査の報告—1993年度の集計—, 岩医大歯誌, 20: 93-97, 1995.
- 4) 佐藤方信, 藤井佳人, 佐藤泰生: 岩手医科大学歯学部口腔病理学教室における病理組織検査の報告—1994年度の集計—, 岩医大歯誌, 20: 312-316, 1995.
- 5) 佐藤方信, 佐藤泰生, 藤井佳人: 岩手医科大学歯学部口腔病理学教室における病理組織検査の報告—1995年度の集計—, 岩医大歯誌, 21: 300-305, 1996.